

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580125

研究課題名(和文) 国境未満の異文化接触/衝突/浸潤

研究課題名(英文) Fluctuating National Boundaries: Intercultural Contacts, Conflicts, Infiltration

研究代表者

池内 敏 (IKEUCHI, SATOSHI)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：90240861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：異文化接触や衝突の議論は珍しくない。本研究は、「国境未満」という作業仮説をもとに、「国境未満」状態における異文化接触、衝突および浸潤の諸様相を検討することを意図した。科研メンバーによる個別研究と、可能な限り多数のメンバーの参加を得て行った現地調査(沖永良部島、利尻島)調査を通じて、そうした課題解決を目指した。その概要は、『JunCtute』07の特集頁にまとめて掲載した。

研究成果の概要(英文)：Discussion of cross-cultural contact or collision is not uncommon. This study, based on the working hypothesis that "less than national borders", cross-cultural contact in "less than the border" state, was intended to examine the various aspects of the conflict and invasion. And individual study by Kaken members, field survey, which was conducted with the participation of a large number of members as much as possible (Okinoerabujima, Rishiri Island) through investigation, aimed at those problem-solving. The summary was published together in a featured page of "JunCtute" 07.

研究分野：近世日朝関係史

キーワード：国境未満 異文化接触 異文化浸潤 越境 竹島 沖永良部 利尻 樺太

## 1. 研究開始当初の背景

竹島・尖閣問題は近年の日韓間・日中間における先鋭な領土問題だが、両島嶼ともに19世紀末～20世紀初頭の時期に日本領に編入された。

本研究は、17世紀から現在までの時間幅をとり、竹島・尖閣問題を領土問題の視野狭窄から解放し、学問的俎上に載せたいと考えた。その際、近代日本の領土拡大(植民地の獲得)によって両島嶼周辺の「国境」がいったん消滅し、第2次世界大戦ののちに再び姿を現す点に留意する。

さて、掲げた研究テーマのうち「異文化の接触」や「異文化の衝突」はこれまでも再三議論が重ねられてきたことと思う。しかしながら、「異文化の浸潤」が問題とされることは多くない。そして、異文化が相互に浸潤することで、一見すると元々の姿を保っているかに見えて、その内実としては化学変化を起こしてしまっている事例に出会うことは珍しくない。また、そうやって「相互に浸潤」することで「ひとつ」になってしまったものが、何らかの外的条件によって元の位置に分かれて復帰することを要求される場合も身の回りに具体例を挙げることが可能である。化学的变化を起こして「ひとつ」になってしまったものを、むりやりに二つに物理的に引き裂こうとするから、そこに新たな軋轢と問題が生じることとなる。そうした軋轢や問題のひとつとして、旧宗主国と旧植民地との間に生じた領土問題(竹島問題)を挙げることが可能である。

したがって、本研究テーマの核心は「浸潤」であり、「浸潤」後の変化(ないしは変化を求める動き)をめぐる歴史学・文学・民俗学・国際関係学等々による学際的な学問的接近なのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、「国境」の消滅と再生が領土問題として顕在化する過程を、歴史学的な手法を中心として民俗学・政治学および比較文学の学問的手法に学びつつ分析しようとする試

みである。

その際、研究テーマの核心は先述のとおり「浸潤」である。

互いに浸潤してひとつとなった「異文化」が、ある歴史的条件下でそれらが本来あった元々の位置に回帰しようとする試みがなされることが、われわれの身の回りにも存在する。融合したものは不純物とみなされて、混じりけの無い純粋なものに高い価値が置かれ、融合の過程が糾弾の対象とみなされる場合すらある。そして純化を主導しようとする者たちのあいだに、様々な隠ぺいや虚言や伝説が紡ぎだされることとなる。したがって、それらは歴史学の対象であるとともに、文学や民俗学・国際関係学的な接近方法によってあぶりだされた像とともに併せ検討することが求められることとなる。

したがって、そもそもの出発点は、既述のとおり竹島・尖閣の問題であったが、必ずしもそれらの課題のみにとらわれず、やや視野を広げながら「国境」の消滅と再生を議論しよう努めた。

## 3. 研究の方法

「国境未満」なる作業仮説をたて、現実に存在する/した「国境」が必ずしも固定的なものではなく、歴史的に生成したり消滅するという事実を踏まえながら考察を重ねよう努めた。

そこで、科研メンバーそれぞれがもつ研究課題を「国境未満の異文化接触/衝突/浸潤」というテーマに即して考え直してみようという個別研究と、可能な限り全員参加のもとで「国境」「境界」を体感できる二つの地域(沖永良部島と利尻島)に集まって、公開研究会・シンポジウムおよび現地調査を行い参加メンバー相互での議論を重ねた。

第一回現地調査(沖永良部島)では、公開研究会(2014年9月20日午前、知名町中央公民館)、公開シンポジウム(同午後、同所)、沖永良部島の全島にわたる歴史的遺物・遺跡の調査(21日)を行った。

公開研究会での発表者・発表題目は以下の通り。

真栄平房昭「境界を越えて移動する人・モノ」

河西秀哉「敗戦後の昭和天皇と「日本」意識」

福原裕二「鬱陵島に渡った日本人」

坪井秀人「『あいぬ物語』と『アイヌ神謡集』における〈国境〉」

木部和昭「明治前期韓海出漁をめぐる日朝国境海域の動向」

公開シンポジウムでの発表者・発表題目  
池内敏「近世日朝間の漂流事件と漂流日記」  
高江洲昌哉「鶏飯をめぐる政治文化史郷土・伝統・我々を再考する」  
渡辺美季「ある島役人の『東アジア』『渡琉日記』を題材に」

なお、これらの研究会、シンポジウム、現地調査に際しては、地元の知名町中央公民館の前利潔さんの協力と尽力を賜り、前利さんも公開研究会およびシンポジウムで口頭発表をしてくださった。

第二回現地調査（利尻島）では、利尻島の全島にわたる歴史的遺物・遺跡調査（2016年2月7日午前）、樺太からの引き揚げ体験者からの聞き取り調査（同日午後）、研究交流会（前記調査に引き続き、午後）、樺太出征経験者からの聞き取り調査（8日午前から午後にかけて）を行った。

研究交流会の発表者・発表題目は以下の通り。

木部和昭「『唐太話』について」  
福原裕二「鬱陵島の日本人」  
河西秀哉「天皇二人の北海道訪問と「日本」」  
池内敏「細井肇の和訳『海游録』」  
坪井秀人「北原白秋の樺太行」  
日比嘉高「樺太における日本人書店史ノート」

また、二回に分けて行われた聞き取り調査の概要は以下の通り。

一回目は樺太から利尻島への引揚経験者3人（76歳・80歳・81歳）からお話を伺った。また、二回目は利尻島から樺太への出征経験者3人（87歳・89歳・90歳）からお話を伺った。前者が、1945年時点で6～11歳、同じく後者が17～20歳であったという年齢差もあり、樺太での体験・記憶に明確な差が感じられた。後者の場合、自らの置かれた立場、世間との関わりなどへの自覚が鮮明だったからである。そうした違いを含みながらも、1945年8月15日を境にしてすべてが急変したわけではなかったことも前者・後者に共通する体験談として伺った。それは話の素材としては必ずしも共通するものではないが、前者の場合には学校教育が8月15日を前後してほぼ変化がなかったことが語られ、後者では戦闘の終わったはずの8月15日を越えてからソ連軍との戦闘が本格化した体験は、戦闘の修了＝既存の境界線が変更された事実の存在にもかかわらず、実体験としては連続性の中にあることが語られたからである。また、食をめぐる渴望の姿には年齢差にもかかわらず前者・後者に共通性が感じられた。

なお、利尻島での島内調査・聴取調査の

差配は、元利尻町立博物館の西谷榮治さんの協力と尽力を得、研究交流集会でも口頭発表をしていただいた。

#### 4. 研究成果

研究代表者は、竹島問題に即して、それまでの研究蓄積を踏まえながら、本科研による共同研究（とりわけ歴史学以外を専門とする研究者との議論）の成果を生かしながら、1冊の著書・5本の研究論文・4つの研究報告という成果物のかたちを得た。

それらのうち著書『竹島 もうひとつの日韓関係史』（2016年1月刊行、中公新書）は、一般読者向けの新書というスタイルでありながら、学術書としての実証性にも耐えうる成果となり、すでにいくつかの書評で高い評価を得ている。なかでも小倉紀蔵京都大学教授による書評（日本経済新聞2016年3月20日付）は、社会的発信力を失ってきた歴史学は本書において復権を果たしていること、とりわけ恣意性を排除した実証性において本書が高く評価されることを述べている。

また、尖閣問題を直接に扱うものではないが、渡辺美季は「近世琉球の境界と中国・日本」と題する研究報告を日本史研究会2014年4月例会で行っており、当日は本科研メンバーも参加して活発な討論が行われたことを付記しておく。

なお、科研メンバーそれぞれによる研究成果とは別に、二回の現地調査を中心とした共同研究の足跡については、『JunCture 超域的文化研究』07号（名古屋大学文学研究科付属「アジアの中の日本文化」研究センター紀要、2016年3月）に特集ページを割いていただいて掲載した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 18 件)

池内敏「「国境」未満」『日本史研究』630、4-23 頁、2015 年 3 月

池内敏「竹島領有権の歴史的事実にかかわる政府見解について」『日本史研究』622、69-82 頁、2014 年 6 月

池内敏「「海図」「水路誌」と竹島問題」『名古屋大学附属図書館研究開発室研究年報』12、9-23 頁、2015 年 3 月、査読あり

池内敏「細井肇の和訳『海游録』 大正期日本人の朝鮮観分析をめぐる断章」『JunCture 超域的日本文化研究』07、68-75 頁、名古屋大学文学研究科付属「アジアの中の日本文化」研究センター、2016 年 3 月

池内敏「日本外務省による大谷家文書調査」『名古屋大学附属図書館研究開発室研究年報』13、29-41 頁、2016 年 3 月、査読あり

池内敏「「竹島は日本固有の領土である」論」『歴史評論』785、79-93 頁、2015 年 9 月、査読あり

高江洲昌哉「近代日本の「文化統合」と地域 「奄美」を事例にして」『大原社会問題研究所雑誌』679、35-48 頁、2015 年 5 月、査読あり

高江洲昌哉「日本「内地」における島庁の設置と植民地における島庁の設置」『アーカイブズ学研究』22、102-117 頁、2015 年 6 月、査読あり

高江洲昌哉「西郷隆盛と「奄美」」『JunCture 超域的日本文化研究』07、18 - 29 頁、名古屋大学文学研究科付属「アジアの中の日本文化」研究センター、2016 年 3 月

渡辺美季「島津重豪と久米村人 琉球の「中国」」『アジア遊学』190、201-206、2015 年 10 月

渡辺美季「近世琉球の女性像 王府と外

国人の語る「女性」」『沖縄県史』各論編 8、17-33 頁、2016 年 3 月

河西秀哉「敗戦後における昭和天皇の「日本」意識」『JunCture 超域的日本文化研究』07、30 - 37 頁、名古屋大学文学研究科付属「アジアの中の日本文化」研究センター、2016 年 3 月

真栄平房昭「海域史からみた王国時代の那覇港 船の活動と港湾施設」『しまたてい』74、10-13 頁、沖縄しまたて協会、2015 年 10 月

福原裕二「竹島/独島周辺海域・日韓暫定水域をめぐる漁業紛争の論点」『漁業経済研究』60 - 1、33 - 42 頁、2016 年 1 月、査読あり

福原裕二「韓国・鬱陵島現地調査報告：「国境」との関わりで」『JunCture 超域的日本文化研究』07、38 - 45 頁、名古屋大学文学研究科付属「アジアの中の日本文化」研究センター、2016 年 3 月

木部和昭「近世・近代移行期における韓海出漁の展開過程」『JunCture 超域的日本文化研究』07、46 - 57 頁、名古屋大学文学研究科付属「アジアの中の日本文化」研究センター、2016 年 3 月

日比嘉高「樺太における日本人書店史ノート」『JunCture 超域的日本文化研究』07、58 - 67 頁、名古屋大学文学研究科付属「アジアの中の日本文化」研究センター、2016 年 3 月

坪井秀人「柵の中で 日系人強制収容所の中の書記空間」『JunCture 超域的日本文化研究』07、76 - 86 頁、名古屋大学文学研究科付属「アジアの中の日本文化」研究センター、2016 年 3 月

[学会発表](計 5 件)

池内敏「「国境」未満」日本史研究会 2014 年度大会、佛教大学(京都市)、2014 年 10 月 11 日

池内敏「竹島は日本固有の領土である」論」朝鮮史研究会第51回大会、京都府立大学、2014年10月19日

池内敏「竹島は日本固有の領土である」論」ソウル大学校日本研究所創立10周年記念シンポジウム、ソウル大学校日本研究所（韓国）、2014年11月21日

池内敏「竹島紛争に残された論点」国際シンポジウム「記憶と歴史の政治とその紛争」、関西学院大学、2015年11月28日

福原裕二「竹島/独島周辺海域・日韓暫定水域をめぐる漁業紛争の論点を探る」漁業経済史学会、東京海洋大学、2015年5月30日

〔図書〕(計 2 件)

池内敏『竹島 もうひとつの日韓関係史』中公新書、1 - 264 頁、2016 年 1 月

河西秀哉『皇居の近現代史』吉川弘文館、1 - 227 頁、2015 年 10 月

〔その他〕

『JunCture 超域的日本文化研究』07 (名古屋大学附属「アジアの中の日本文化」研究センター紀要、2016 年 3 月)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

池内 敏 (IKEUCHI, Satoshi)  
名古屋大学大学院文学研究科・教授  
研究者番号：90240861

### (2) 研究分担者

高江洲 昌哉 (TAKAESU, Masaya)  
神奈川大学外国語学部・非常勤講師  
研究者番号：10449366

木部 和昭 (KIBE Kazuaki)  
山口大学経済学部・教授  
研究者番号：20263759

河西 秀哉 (KAWANISHI, Hideya)  
神戸女学院大学文学部・准教授  
研究者番号：20402810

福原 裕二 (Fukuhara, Yuji)  
島根県立大学総合政策学部・准教授  
研究者番号：30382360

真栄平 房昭 (MAEHIRA, Fusaaki)

琉球大学教育学部・教授  
研究者番号：50183942

渡辺 美季 (WATANABE, Miki)  
東京大学総合文化研究科・准教授  
研究者番号：60548642

日比 嘉高 (HIBI, Yoshitaka)  
名古屋大学大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：80334019

坪井 秀人 (TSUBOI, Hideto)  
国際日本文化研究センター研究部・教授  
研究者番号：90197757